

2021年2月28日

## 2021年1月26日（令和2年度第2回）実施の

### タンチョウ越冬分布調査結果について

正富宏之

#### はじめに

前年同様に、15時を中心とする30分内に目撃されたタンチョウの所在位置、幼鳥・成鳥別羽数、所在地の環境等について調査が行われた。ただ、環境省による給餌量削減事業の影響で、タンチョウの日周活動が変化し、給餌場における午後の観察だけでは個体数の確実な把握ができないため、釧路市阿寒町や鶴居村ではねぐらや大規模給餌場での9時の観察記録が採用されている。

なお、このコメントでは、従来同様に飼育個体を除いた羽数を対象としているほか、行政区を示す際にすべて振興局の表記を省略してある。

#### 1. 記録羽数とその特徴

##### 1-1. 総羽数

目撃総数は1,478（うち成鳥1,314、幼鳥141、成・幼鳥不明23）羽で、今年度第1回調査（2020年12月4日、以下12月調査と称す）結果より419（成鳥+455、幼鳥+2、不明-38）多かった。また、過去最多であった前年同期の第2回調査（以下1月調査と称す）の1,333羽より総数で145（成鳥+92、幼鳥+37、不明+16）羽多く、昭和27（1952）年の生息数調査開始以来、最も多い羽数を記録したことになる。なお、成鳥数（亜成鳥を含む）は過去最多であるが、幼鳥数は平成23年度（2012年1月）に147羽が記録されているので、今回は過去2番目の多さである。

##### 1-2. 増減の割合

一般に、12月調査より1月調査において成鳥数・幼鳥数とも増加を示すが、今年度は総数が1.4倍で、このうち成鳥が1.5倍なのに、幼鳥はほぼ同数であった。直近の10（2011-2020）年間で1月調査時に幼鳥の増加率が5%以下だったのは、2012年、2019年、2020年の3年度のみである。

前年同期に比べると、総数は10.9%の増加で、特に幼鳥は35.6%の大幅増加となり、前年がマイナスの増加率であったから、今年は幼鳥の確認が多かったことを示している。ただ、前年比幼鳥数割合の大幅増加は、2000年以降7回ほど記録されており、年により羽数の把握にかなり

の“ぶれ”があるため、特異的な現象とは言えない。

### 1-3. 各給餌場の飛来数

いわゆる五大給餌場で羽数が最も多く記録されたのは下雪裡（通称鶴見台）給餌場（以下給餌場を省略）の258羽で、前年（250羽）と同程度の羽数であった。ついで、中雪裡（サンクチャリ）231羽、音別165羽、阿寒148羽、中茶安別106羽の順である。このうち、前年2番目に多かった阿寒が25羽減って4位となったのに対し、同じ釧路市の音別で80羽も増えたのが注目される。また、中雪裡でも70羽増加し、中茶安別でも31羽増えて100羽の大台に回復した。ただ、2015年度から三大給餌場の阿寒、中雪裡、下雪裡で与える餌の量を毎年一定割合で減らしている。そこで、三大給餌場における最近5（2015-2019）年間の1月調査の平均羽数をみると、阿寒が149（範囲122-173）羽で今年とほぼ同数、中雪裡が152（59-289）羽で79羽、下雪裡が180（85-250）羽で78羽、いずれも今年の方が多。

しかし、給餌場のカウント数は、各年の調査日の状況などで大きく変わることも多く、一概に上に述べた数字だけで給餌場の特色や傾向などを説明するわけにいかない。それでも、2014年度まで阿寒で200羽以上を数える年も珍しくなかったのに、2015年度からは全く記録されず、下雪裡でもかつての300羽台の記録は影を潜めた。ごくおおざっぱに言って、給餌量削減により三大給餌場への最多飛来数は多少下がる傾向を示しているが、今年の中雪裡と下雪裡ではそれに逆らうように羽数が増えたことになる。

### 1.4 個体数について

今年のタンチョウ数は、昨年の記録数を超えて過去最多を示した。これは、例年になく寒さの中、ボランティアで調査に参加された調査員の方々のご協力によると同時に、そうした組織運営をされた行政担当者の方々の努力の賜物であり、心から敬意を表したい。同時に、近年になく寒さの継続で、ねぐらや索餌に使う小河川等が凍結し、結果として、餌の採れる給餌場など人目につくところへ集まり羽数が捉えられたという、気象条件も大きく関わったと考えられる。このことが、五大給餌場での今年の羽数記録割合が前年より上昇し（+5.6ポイント）、小採餌場（※）では反対にその分下がった（-5.6ポイント）ことにも表わられている。

ただ、今年の記録でも、現存タンチョウの実数よりまだ数100羽少ないとみられる。広く散らばっているタンチョウの実像を捉えるには、より多くの場所に、より多くの人の目が必要である。タンチョウの成鳥と幼鳥の見分けは難しくないので、マナーを守ればどなたでも参加できる調査である。ぜひ、多くの人に参加して、タンチョウという自然の美を感じ取っていただきたい。

（※小採餌場の数は、五大給餌場以外の自然採餌・小給餌場の総数）

## 2. 分布状況

### 2-1. 分布管内数

タンチョウの目撃された地域は、前年同様胆振、日高、十勝、釧路、根室の5管内である。自治体では日高の1町で初めて記録されたが、十勝の2町で記録が途絶え、総数は17市町村で昨年より1自治体少なかったものの、全体的に大きな変化はなかった。

### 2-2. 各管内への集中度

管内別では、釧路の羽数が全体の94.2%を占め、次いで十勝3.4%、根室1.8%、日高0.4%、胆振0.2%で、順位は前年と変わらない。最大の割合を占める釧路管内では、2015年度から三大給餌場で与える餌の量を減らして集中低減を試みているが、最近5(2015-2019)年間の平均分布割合は全体の93.9(範囲92.3-96.7)%で、今年は平均を上回り、餌削減の効果は管外までは及んでいない。

### 2-3. 市町村別の分布

タンチョウが目撃されたのは3市、13町、1村の計17自治体で、12月調査の時より7町少ない。前年の1月調査と比べると、今年は音更町と浦幌町で目撃されず、日高の新冠町で初めて記録されたが、分布全体に大きな変化があったとは言えない。

これら自治体で最も羽数が多かったのは鶴居村の698羽で、総数の47.2%を占め、次いで音別と阿寒の給餌場を含む釧路市が417羽で28.2%、さらに標茶町188羽で12.7%を保ち、この3自治体で全体の88.2%を占める。この3自治体の最近5(2015-2019)年間の平均割合が88.8(範囲86.3-93.0)%なので、今年は平均より0.6ポイント低いものの、前年より0.1ポイント高い。ちなみに、釧路市は前年より83羽、鶴居村は87羽それぞれ増加し、標茶町は41羽減少した。従って、三大給餌場における餌削減による集中低減効果が他の自治体へ及んでいるかは、明らかではない。

各自治体の羽数分布の年変動、たとえば鶴居村における前年の611羽から今年の698羽への増加や標茶町の229羽から188羽への減少は、いくつかの要因が関わると考えられる。その一つとして、給餌場以外でタンチョウが餌場とする例えば畜産施設で改修・新設工事などが起きれば、こうした人間の活動がタンチョウの分布変化を容易に招くことも忘れてはならない。

### 2-4. 利用環境

タンチョウが最も多く観察されたのは、草地を利用した給餌場や道東の農耕地で、総数の76.7%がこうした環境で記録された(図2)。ただし、これには五大給餌場の給餌時刻に合わせ

た、日中のごく限られた時間内での調査結果が主となっていることを理解しておく必要がある。

今年は河川・湿地での目撃数が前年同期の5分の1（前年202羽→今年39羽）、割合では6分の1以下（15.2%→2.6%）へ減少し（図2）、給餌のない場所の内訳でも、前年の196羽から38羽（前年比-30.2ポイント）へと激減した（図3-2）。反対に給餌場での記録数が186羽（前年比6.5ポイント）増加したし（図3-1）、給餌場のないところでも冬に餌が得られる堆肥場・堆肥山への出現が大幅に増加（前年比15.9ポイント）している。個体数の項でも述べたように、恐らく今年の気温低下による水域での索餌の難しさが、給餌環境・採餌可能環境への移動を促したとみてよい。

### 3. 繁殖状況

確認された幼鳥数は141羽で、幼鳥・成鳥不明を除いた全体における割合は9.7%である。昨年より37羽も多く、最近5（2015-2019）年間の平均9.2%を0.5ポイント上回る。また、小採餌場をよりどころに暮らす番いは一般に幼鳥連れが多いため、そのグループを対象に最近5年間（上記）の平均を計算すると9.9%なのに、今年は3.5ポイントも高い13.4%を示した。今のところ、北海道に生息するタンチョウの正確な羽数が捉えられていないため、今年の数値が確実な幼鳥割合を示すか定かでないが、実数・割合とも比較的高い値なので、今年度の繁殖状況は良好であったと推定できよう。

### 4. 提言

北海道のタンチョウは順調に個体数を増し、道北や道央へも進出しているが、特に冬期は依然として一部地域に多数個体が集まって暮らしている。このため、近年は過密化に伴うリスク低減を意図し、集中抑制のための給餌量削減なども行われ、人目につきにくいところへ散らばって越冬するものもいると想定される。そうした個体をなるべく漏らさずに記録するには、何と言っても多数の人の目が必要である。

現在は、多くのボランティアの人たちが自家用車などを用いて広域調査に参加しているが、それでも実数の把握にはまだとても手が届かないのが現状である。その打開策として、多くの現代人が日常使うスマートフォンによる撮影・情報伝達機能を活用すべきである。現に、例えば天気情報では、各地点における状況の集積方式が機能しており、現状把握に大いに成果をもたらしていると思われる。従って、冬に身近にツルと日常過ごしている人たちからの情報収集システムを構築することで、より実態に近いツルの分布や羽数の把握が可能になり、さらにはそれを基にタンチョウの有効な保全維持策実施へつなげることが可能になる。